

研究発表会



研究主題

21.5世紀を拓く

～資質・能力を育む黒門流の授業づくり～



平成31年 2月15日(金)
台東区立黒門小学校



挨拶

台東区教育委員会 教育長 矢下 薫

平成 29 年 3 月に告示された新学習指導要領では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、全ての教科等の目標及び内容を三つの柱で再整理し、学習の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められると明記されました。

台東区教育委員会におきましても、平成 25 年 3 月に策定した「学校教育ビジョン」において、施策目標の第一として「これからの社会を生き抜く力を育成する」ことを掲げております。子供たち一人一人が夢とこころざしをいだき、変化が激しく急速に進展する 21 世紀の社会を生き抜くための力を身に付けることが重要であると捉え、各校園においてはこれからの社会を生き抜く力を育成するための教育・保育の充実を図っております。

そのような折、台東区立黒門小学校では、平成 29・30 年度台東区教育委員会研究協力学校として、研究主題を「21.5 世紀を拓く～資質・能力を育む黒門流の授業づくり～」と設定し、予測が困難な時代を生き抜く子供たちにとって必要な資質・能力を明確にした上で、授業実践・授業改善を進めてこられました。

各学校におかれましては、本校における取組や研究・実践発表の内容を教育活動に取り入れることで、より一層子供たちの「生き抜く力」を育成していただけるものと確信しております。

最後になりましたが、本校の研究を推進するにあたり、丁寧な御指導・御助言を賜りました講師の先生方に心から感謝申し上げます。また、本校の研究に熱心に取り組んでこられました、千木良康志校長先生、そして教職員の皆様方の御努力に対しまして、深く敬意を表します。



今、世界をつくるのはきみたちだ！ 台東区立黒門小学校長 千木良 康志

台東区立黒門小学校では、これまでの研究の成果を踏まえつつ、激しい変動が予想される未来社会を 2050 年（21.5 世紀）と具体的に位置付け、子供が新たな知を拓くために必要な資質・能力を育成する「21.5 世紀を拓く」黒門教育の推進に努めてまいりました。

我が国は、知識基盤化やグローバル化の進展、雇用環境の変化など、多岐にわたる課題に直面しており、先行きの不透明感や人間関係の希薄化が進みつつあります。そういった中で、東日本大震災をはじめとする災害を教訓とする人と人との絆の大切さが改めて見直されてきました。

しかし、日本だけでなく世界に目を向けると、危機はすぐそこまで迫ってきています。

第一次世界大戦の休戦協定の調印からちょうど 1 世紀後となった 2018 年 11 月 11 日、フランスパリの凱旋門での式典でフランスのマクロン大統領は、20 分間に及んだ演説の中で、ポピュリズムやナショナリズムを厳しく非難し、参加国首脳らに対し過去の教訓から学ぼうと呼び掛けました。

これからの時代や世界は、今、目の前にしている子供たちが築いていきます。そのために、未来への課題を踏まえ、夢と志をもち、互いに磨き合い、様々な分野において豊かで創造的な知性を発揮し、主体的に未来を生き抜く力を身に付けた子供を育てることが大切です。また、人間性豊かな社会を築くためには、多様性を認め合い、他と協働し、共に支え合う人間関係を育てることが求められています。

黒門小学校では、「学校は人との関わりを通して、その有効性を実感し、より多くの方が自分の仲間であることを学ぶ場」という学校観と、「すべての子供たちは有能である」という子供観に立ち、教育活動を推進し研究に取り組んできました。

研究副主題でもあります「資質・能力を育む黒門流の授業づくり」につきましては、「よい授業の追究」「アクティブ・ラーニングの視点を生かした授業づくり」「深い学びの追究」という授業を核とした研究の積み重ねから、「黒門流の授業づくり」7 箇条を生み出しました。それは、①学習ゴールの設定と共有化 ②深い学びに導く課題解決学習 ③学習過程の可視化 ④身に付く力の自覚 ⑤自他の既存知の活用 ⑥豊かな学び合い ⑦見通しのある振り返り というものです。

本年度は、その有効性を追究するとともに、その汎化に努めてきました。このことが、2050 年を目指した次世代型授業の創造につながれば幸甚です。

今回、平成 29・30 年度台東区教育委員会研究協力学校の指定を受け、「21.5 世紀を拓く～資質・能力を育む黒門流の授業づくり～」という研究主題のもと、研究を進められたことが、黒門教育の一層の充実につながるとともに、台東区の教育や子供たちの学びに一石を投じられたと考えております。このような貴重な機会を与えて下さいました台東区教育委員会をはじめ、6 年間にわたり年間講師として御指導下さいました中田正弘先生、シンポジストの白井俊先生に衷心よりお礼申し上げます。

研究のグランドデザイン

将来の姿

かしこさ（自立）

自己管理、省察力
見通し、判断
情報処理・活用

ひらめき（創造）

創造への関心・意欲
活用力、表現力

かかわり（共生）

思いやり、認め合い
コミュニケーション
チームワーク

教科等で育成すべき 三つの資質・能力

個別の知識・技能

学びに向かう力
人間性 等

主体的・
対話的で
深い学び

学習

思考力・判断力
・表現力 等



現在の子供たち

＜研究仮説＞

7 箇条を意識した授業づくりをすることで、児童の「主体的・対話的で深い学び」が実現でき、21.5 世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力が身に付くであろう。

＜21.5 世紀をよりよく生きるために必要な資質・能力と、目指す児童像＞

21.5 世紀をよりよく 生きるために必要な 資質・能力	ひらめき（創造）	かしこさ（自立）	かかわり（共生）
	○よりよいものを創造しようとする関心・意欲 ○知の活用力（発想する力・つなぐ力・表現力）	○自己管理能力 ○自立性・自律性 ○省察力 ○先を見通し、自ら考え、判断する力 ○情報処理・活用力	○相手を思いやり、認め合う心 ○折り合いを付けられるコミュニケーション能力（合意形成力） ○チームワーク
目指す児童の 未来像	○自他の考えを整理したり、比較したり、関係付けたり、置き換えたりすることができる。 ○既存知を活用して、新しい知にたどりつくことができる。	○主体的な課題解決への意識をもつことができる。 ○課題を発見し、課題に対して見通しをもち、自ら追究し解決できる。	○他者との関わりを通し、自分の考えを再構築できる。 ○互いを尊重し合いながら自己表現ができる。
目指す児童	高学年	○課題に対して見通しをもち、自ら考え解決できる。	○他者との対話を大切にし、自分の考えを再構築したり、表現できたりする。
	中学年	○課題解決に向け見通しをもって取り組み、自分の考えをもつことができる。	○互いのよさや考えを認め合い、折り合いを付けることができる。
	低学年	○課題を理解して、それを解決する方法をこれまでの経験の中から選び出すことができる。	○友達の話をよく聞いたり、自分の考えや思いをはっきり伝えたりすることができる。

研究の内容と方法

●資質・能力を育む「黒門流の授業づくり」7箇条

資質・能力は、学びのプロセスで育つ！

では・・・どんなプロセスをつくればよいのか？

これまでの研究の蓄積から、本校で大切にしてきた「授業づくり」の要素を精選し、「黒門流の授業づくり」7箇条としてまとめ、有効性を追究するとともに、その汎化に努めています。

1 学習ゴールの設定と共有化

子供たち一人一人の内発的学習意欲を喚起するような学習ゴールを設定し、共有化を図る。この学習ゴールは、容易に達成できるものではなく、対話的に学び合って初めて達成できる難易度にする。このことにより、深い学びと達成感を味わうことができる。

2 深い学びに導く課題解決学習

目標とする学習ゴールの達成のため、毎時間、学習課題を設定し、解決に向けた学習活動を行う。この学習課題は、児童・指導者ともに学び合う価値があり、質の高い魅力的な問いとする必要がある。この課題解決学習を通して、子供たちは深い学びを実現することが可能となる。

3 学習過程の可視化

単元の学習計画や本時の流れを見えるように掲示する。このことにより、「本時がどの段階にあるのか」「今何をすべきなのか」を常に意識し、児童が見通しをもって学習に取り組むことが可能となる。

4 身に付く力の自覚

単元を通して、どのような力が身に付くのかを示す。「身に付く力」を自覚していることは、主体的な学びの動機付けとなり、各教科における深い学びへとつながる。

5 自他の既存知の活用

児童の既習事項や生活経験の中から、課題を解決するための有効な手掛かりがないか考えさせる。既習事項から「何か使える考えはないか」、過去の経験から「同じような場面はなかったか」と類推的に考える習慣を常にもたせることで、汎用性のある学習が期待できる。さらに、自他の既存知を相互に関連付け活用することにより新たな知を生み出すことが可能となる。



1年生 生活科 あきとともだち

～ぼくたち、わたしたち あきのあそびたんけんたい～

<学習内容>

校外学習で秋を見付けていく学習の中で、「集めてきたどんぐりやまつぼっくりを使っていろいろなものづくりしたい!」という思いをもった子供たち。たくさん集めた材料を思う存分使って、木の葉や木の実の特徴を生かした作品づくりをしました。

【3 学習過程の可視化】

秋を見付けようというスタートから「こんなことをしてみたい」「次はこれを使って遊びたい」という児童のつぶやきや振り返りの言葉を拾い上げ、それを全体で共有しながら次の活動を考えさせました。自分の思いや願いが活動につながっていくことで、児童がこの学習を自分でつくり上げていくという実感や達成感をもたせることができました。

【5 自他の既存知の活用】

1年生の発達段階を考慮し、対象物との対話、自己との対話を妨げるのではないよう授業づくりをしました。直接体験や遊びを重視し、児童一人一人がそれぞれの思いや願いをもてるよう、自由に対象に触ったり、観察をしたりできるような時間を確保しました。

【2 深い学びに導く課題解決学習】

教室内に「あきコーナー」を設け、どんぐりや葉っぱ等を自由に触れるようにしました。秋の自然に関する図鑑や本もまとめて置いておき、いつでも手に取れるようにすることで、日常的に秋に親しむことができ、児童の思いや願いを誘発することができました。

2年生 生活科 町が大好きたんけんたい

<学習内容>

まちたんけんで見に行ったお店に再び行く前に、お店の人に質問する内容を考えました。前回のたんけんメモを基に、まずは自分でどんな質問をしたいかを考え、次にグループで話し合って質問を決めました。

【2 深い学びに導く課題解決学習】

段階的に対象と関わっていけるよう、まちたんけんを繰り返し行う計画を立てました。探検を繰り返すことで地域に対する知識を増やし、理解を深めることができました。また、「もっと知りたい」「もっと詳しく調べたい」という内発的な動機を喚起させることができました。

【6 豊かな学び合い】

グループで質問をまとめさせました。児童は互いの付箋を見合いながら、友達が付箋に書いていた質問や、友達の考えを基に自分も聞いてみたいと思った質問などを選びました。

【4 身に付く力の自覚】

授業の終わりには、この学習を通して身に付く力を基に自身がそれを達成できそうか考えさせました。また、今日できたことや感じたこと、次回のまちたんけんに向けてがんばりたいことなどをカードに記入させました。

3年生 社会科 台東区をしょうかいしよう

<学習内容>

地図を基に、台東区に古くからある建造物（寺や神社）の場所を確認し、グループで白地図内に記入していきしました。完成した白地図から台東区の特徴を考えました。

【3 学習過程の可視化】

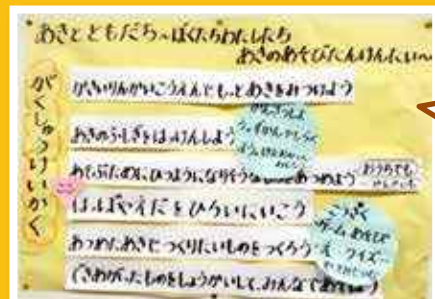
授業のはじめに、前の時間まで習ってきたのか、今日は何を習ったのか、教師が掲示した学習過程を基に確認

【5 自他の既存知の活用】【6 豊かな学び合い】

児童はグループで地図を見て、白地図に記入していきしました。友達と話し合いながら、どこに寺や神社があるか、地図記号を使って書き込んできた白地図を見ながら、どのようグループで話し合って考えました。「ということは」「つまり」などの言葉で考えたことをまとめました。

【7 見通しのある振り返り】

まとめとして各グループで考えた特色を発表させました。児童は台東区には寺や神社など古い建物がたくさんあることに気付きました。また、お祭りなど昔からある行事が多いことに関連付ける考えも出てきました。最後に自分の学びを振り返り、学習シートに記入しました。よい記述は全体で共有し、児童の視点を広げ、振り返る力を育てるようにしています。



5 自他の 既存知の活用

児童の既習事項や生活経験の中から、課題を解決するための有効な手掛かりがないか考えさせる。既習事項から「何か使える考えはないか」、過去の経験から「同じような場面はなかったか」と類推的に考える習慣を常にもたせることで、汎用性のある学習が期待できる。さらに、自他の既存知を相互に関連付け活用することにより新たな知を生み出すことが可能となる。

6 豊かな学び合い

まずは、児童一人一人が課題解決への見通しをもち、自力解決を行う。その中で、疑問に思ったことや分からないことなどを友達に聞いたり、自他の考えを交流したりするなど個人から集団へ学びを広げられるようにする。個人で課題解決に取り組む時間を保障することはもちろん、少人数グループでの話し合いや他のグループと情報交換、学級全体で自由に話し合う時間も保障する。このような対話的な学習形態は、児童相互の考えの再構築へとつながり、より深い学びが可能となる。

7 見通しのある 振り返り

自発的な学びや気づきを経て、次にすべきことを判断できるよう「振り返り」に沿って、「今日はこの力が身に付いた」「この経験で自分はこう成長した」等、よい記述は全体に紹介し、児童の視点を広げ、振り返る力を育てるようにする。しが自己の学びを客観的にみることにつながり、学習に時間的・空間的な広がりが生まれる。

学習力の 自覚

どのような力が身に付くのかを示す。自覚していることは、主体的な学習となり、各教科における深い学びへつながる。

調べる

深める・広げる

まとめる・振り返る

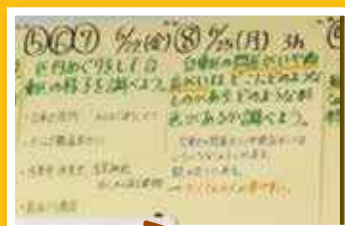
生かす・つなぐ

各学年の実践より

3年生 社会科 台東区をしょうかいしよう

<学習内容>

地図を基に、台東区に古くからある建造物（寺や神社）の場所を確認し、グループで白地図内に記入していきました。完成した白地図から台東区の特徴を考えました。



【3 学習過程の可視化】

授業のはじめに、前の時間までにどのような学習をしてきたのか、今日は何をするのかなど、教師が掲示した学習過程を基に確認しました。

【5 自他の既存知の活用】【6 豊かな学び合い】

児童はグループで地図を見て、白地図へ記入しました。友達と話し合いながら、どこにどのような建物があるか、地図記号を使って書き込んでいきます。次に、できた白地図を見ながら、どのような特徴があるかグループで話し合っていました。つかんだ事実から、「ということは」「つまり」などのキーワードを使って、考えたことをまとめました。

【7 見通しのある振り返り】

まとめとして各グループで考えた特色を発表させました。児童は台東区には寺や神社など古い建物がたくさんあることに気付きました。また、お祭りなど昔からある行事が多いことに関連付ける考えも出てきました。最後に自分の学びを振り返り、学習シートに記入しました。よい記述は全体で共有し、児童の視点を広げ、振り返る力を育てるようにしています。

4年生 社会科 「郷土の発展につくす」 ～東京のまちをきずいた人 後藤新平～

<学習内容>

関東大震災からの復興における、後藤新平の働きや人々の生活が向上したことについて調べ、帝都復興事業にたった人々の思いや願いを考えました。

【2 深い学びに導く課題解決学習】

単元の導入で、東京都復興記念館を見学する計画を立てました。児童は関東大震災の被害の大きさや帝都復興事業がいかに大変だったのかを知り、後藤新平がどのような願いや思いをもって帝都復興計画を進めていったのかを意欲的に考えました。

【2 深い学びに導く課題解決学習】

調べる過程における1単位時間の学習の流れを「事実をつかむ→事実を基に思いや願いを考える」という同一サイクルにしました。児童はこのサイクルを繰り返すことにより、学習の仕方が自然と身に付き、前時で学習したことが次時に生かせるようになりました。資料の読み取り方はどうすればよいのか、調べた事実からどのように考察したかなど、前時での学びを生かせるようにしました。

【6 豊かな学び合い】

児童は付箋に書き込んだことを関連付ける活動で、友達の考えや視点のよさに気付いたり、新しいものの見方や考え方を得たりすることができました。友達との対話を通して自己の考えを広げ深めることができました。

5年生 国語科 「上野の町じまん」を 一つ選んで、すいせんしよう

<学習内容>

上野の町の自慢を、台東区の友好都市である長野県諏訪市の人々に紹介することをゴールとして、グループで上野の町の自慢したい場所やお店を推薦しました。話に説得力をもたせるための効果的な話し方や発表方法を工夫したり、友達の話を納得できるか考えたりしました。

6年生 国語科 卒業プロジェクト ～黒門小学校を紹介しよう～

【6 豊かな学び

児童はグループで調べたことを基に、自分たちの学校を紹介するためのプレゼンテーションを作成しました。友達と話し合いながら、自分たちの学校の魅力を伝えることができました。

7 見通しのある振り返り

自発的な学びや気づきを経て、次にすべきことを判断できるよう「振り返りの視点」に沿って、「今日はこの力が身に付いた」「この経験で自分はこう成長した」等を考えさせる。よい記述は全体に紹介し、児童の視点を広げ、振り返る力を育てるようにする。この繰り返しが自己の学びを客観的にみることにつながり、学習に時間的・空間的な広がりをもたせる。

生かす・つなげる

振り返る

ゴール



信濃毎日新聞 2018/11/16 掲載



【4 身に付く力の自覚】

単元の学習を通してどのような力が身に付くのかを示しました。学習ゴールまでの段階が明らかにされていることで、児童は次にすること、その次にすることが分かり、単元全体の活動を把握し、見通しをもって学習を進めることができました。また、児童はどのような点に注意して活動すればよいかを合わせて示すことで、自主的に進めることができました。

【5 自他の既存知の活用】

2・3年生で学習したことやこれまでの経験を思い起こさせたり、3年生で使用した副読本を資料として再度用意したりすることで、上野の町について考えさせ、今回の学習につなげました。

【1 学習ゴールの設定と共有化】

諏訪市は、児童にとって霧ヶ峰学園移動教室で訪れた場所で、親しみのある町です。諏訪市の人々に、上野の町を紹介するという明確なゴールを提示することで、児童の興味・関心は高まりました。また、完成したポスターは、諏訪市の人々に見ていただき、児童の自己有用感も高めることができました。

【2 深い学びに導く課題解決学習】

総合的な学習の時間『1年生と仲良くなるう大作戦』とも関連させ、学習を進めました。児童は1年生保護者に実際にインタビューすることで何を知りたいのかをはっきりさせることができました。また、自分たちが伝えたいことと相手が知りたいことがうまく結び付くところを成果物で簡潔に書くことができました。

【7 見通しのある振り返り】

児童が学習の見通しをもって進めていくために、単に学習の進め方を確認させるだけではなく、「自分は何ができるようになったか」、「何が分からないのか」、「何を解決すべきなのか」を十分に認識させる振り返りを大切にしました。また、現在の自分の学習状況がどの段階にいるのかを考えながら、見通しをもてるようにしました。



5年生 国語科 「上野の町じまん」を一つ選んで、すいせんしよう

<学習内容>

上野の町の自慢を、台東区の友好都市である長野県諏訪市の人々に紹介することをゴールとして、グループで上野の町の自慢したい場所やお店を推薦しました。話に説得力をもたせるための効果的な話し方や発表方法を工夫したり、友達の話を受容できるか考えたりしました。



6年生 国語科 卒業プロジェクト ～黒門小学校を紹介しよう～

<学習内容>

6年生の卒業プロジェクトの一つとして、来年度の入学を検討している保護者に対して、黒門小学校を紹介するパンフレットを作成しました。読み手の立場に立って考えさせたり、一つのグループのよいところを他グループに紹介してつなげたりしました。

【6 豊かな学び合い】

児童はグループ内で事前に分担した仕事を進めながら、分からないところを聞き合ったり、他のグループの様子を見に行き参考にしたりと、豊かに学び合いました。教師はガイド役となり、読み手の立場に立って考えさせたり、一つのグループのよいところを他グループに紹介してつなげたりしました。



課題解決学習】

復興記念館を見学する計画を立てる。震災の被害の大きさや帝都復興記念館の役割を知り、後藤新平がもって帝都復興計画を進めようとしたことを学びました。



学び合い】

書き込んだことを関連付け、自分の考えや視点のよさに気づく。ものの見方や考え方を得た。友達との対話をし、考えを広げ深めることができました。

黒門流の研究協議会

ねらいに応じた「よい授業」となったかどうかを検証するために、研究協議会のもち方を工夫しました。ワークショップ型・授業実践リフレクションを取り入れ、授業者及び参観者が対話的に授業を振り返ることができるようにしました。

①事前に、学習指導案を読み込む

分科会の提案や単元の流れ、本時の流れをつかむ。

②授業を参観し、記録を取る

授業観察において、効果的もしくは課題と感じた授業場面の、教師と子供の行為・発言・つぶやき・記述などの事実を記録する。



③付箋に書く

授業記録を付箋に記入する。(効果的・有効と感じたことは青色、課題と感じたことは桃色、それぞれの根拠となる事実が黄色の付箋)



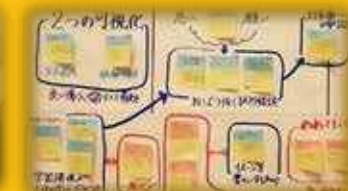
④書いた付箋を模造紙に貼る

書き出した付箋を学習過程ごとに区切られた模造紙に貼っていく。



⑤メンバー協同で構造化する

協議会では、小グループで付箋に記入した事実を基に、ディスカッションをする。その中で関連付けを線で結んだり、付箋を移動させて分類したりする。



⑥全体でディスカッションを行う

グループで協議したことを全体にプレゼンテーションする。ファシリテータが、このプレゼンテーションから共通の論点を見だし、全体のディスカッションにつなげる。



⑦ファシリテータ、講師によるまとめを行う

このようにすることで、発問や資料提示の仕方などを構造的に捉え、「よい授業」ができたかどうかを検証するとともに、授業改善に生かすことができました。

研究の成果と課題

「黒門流の授業づくり」7箇条を設定し、よりよい授業を実践することは、新しい学習指導要領にある三つの資質・能力を育むことに有効であるとの知見を得た。

<成果>

- ◇「学習ゴールの設定と共有化」と「学習過程の可視化」は、『主体的な学び』を引き出すために有効であった。具体的かつ魅力的な学習ゴールを提示することで、相手意識や目的意識が明確になり、学習意欲を高めることができた。また、常に学習ゴールを意識し、自らの学びを確かめながら見通しをもって学習に取り組むことができた。
- ◇「身に付く力の自覚」と「見通しのある振り返り」は、『深い学び』を引き出すために有効であった。どのような力が身に付くか示したり、振り返りの視点を明確にしたりすることで、深い学びを引き出すことができた。
- ◇学習課題を共有し、課題解決に向けて「豊かな学び合い」をすることは、『対話的な学び』を活性化し、「自他の既存知を活用」して新たな知を生み出すことができた。

<課題>

- ◆『深い学び』に導くための多面的な各教科等の「見方・考え方」の捉え方
- ◆教師の役割の明確化

御指導いただいた講師の先生

帝京大学大学院教職研究科 教授 中田 正弘 先生

研究に携わった教職員

校 長	千木良康志	
副 校 長	栖原 太郎	
1 年	○栗田由紀子	高橋 明子
2 年	○板井 信孝	飛澤久並子
3 年	藺田 雅子	○平山 陽介
4 年	初谷 京子	○山岸 正太
5 年	○飯田 泰	谷内 良隆
6 年	◎松本 大将	村松 真帆
音 楽	吉野 紋佳	
図画工作	○平塚 香織	
算数少人数	○深町奈緒子	
養 護	梶山 弥恵	
学校事務	小坂橋淳子	
栄養士	飯田 里子	

きこえとことばの教室	藤村 洋子	金子 清輝
	菊池 理恵	小瀬川智一
	福井 珠希	霞 邦子
	榎並健之介	
さくら教室	小野塚美春	竹内 忍
	中里 星香	
講 師	小栗 歩	豊田 啓孝
	中村 典子	篠原くみ子
特別支援教室専門員	平澤 盛人	
支 援 員	鈴木 祥子	本田 幸雄
	大塚みどり	
図書司書	戸田 藤男	
スクールカウンセラー	脇川 貴臣	橋立 藍子
産 育 休	工藤 彩子	

◆平成 29 年度

瀧島 和則	川畑 裕子	海野 慧一	加藤 恭子	橋詰 智子	林 さおり
丸 康夫					

◎研究推進委員長 ○研究推進委員